

地球惑星科学委員会

地球・惑星圏分科会地球観測衛星将来構想小委員会（第26期・第1回）議事要旨

日時：令和6年4月9日（火）13:00-15:00

場所：オンライン会議（zoom）

出席委員：金谷有剛、佐藤薫、高薮縁、中島映至、中村尚、古屋正人、村山泰啓、横山広美、
榎本浩之、岡本幸三、岡本創、沖理子、笠井康子、河宮未知生、ケオラ スックニラン、
杉山昌広、祖父江真一、高橋暢宏、永井信、中島孝、中島英彰、早坂忠裕、
樋口篤志、本多嘉明、増永浩彦、溝端浩平（26名）

欠席委員：沖大幹、伊藤進一、江口菜穂、重尚一（4名）

（以上敬称略、名簿順）

議 題

1. 自己紹介
2. 録画の承認
3. 役員の選出
4. 議事要旨の提出に関する委員長一任について
5. 小委員会委員間のメールアドレス共有について
6. 25期小委員会の活動報告
7. 26期小委員会の活動方針について
8. その他

議事録：

1. 自己紹介
出席者の自己紹介を行った。
2. 録画の承認
録画することについて承認した。
3. 役員の選出
以下の通り役員を選出した。
委員長：高薮縁（東大）
副委員長：早坂忠裕（東北大）、金谷有剛（海洋研究開発機構）
幹事：高橋暢宏（名古屋大）、江口菜穂（九州大）
4. 議事要旨の提出に関する委員長一任について
議事要旨の提出について、委員長に一任の旨、合意を得た。

5. 小委員会委員間のメールアドレス共有について

今期の本小委員会では共有することで合意を得た。

6. 25期小委員会の活動報告

高薮委員長から25期の活動報告と今期の本小委員会の設置目的について説明があった。

25期においては見解（資料4）を取りまとめ、地球観測全体を統合的に捉えた戦略を立案する必要性を提案した。また、公開シンポジウムを開催し、各専門分野から、行政機関から、学术界、また今回は少なかったが産業界からも参加を得た。

今期は24期、25期のフォローアップを念頭に、政府や学術会議のほか、産学官連携を進める衛星地球観測コンソーシアム、地球観測衛星の当事者のコミュニティ、JAXAや気象庁などの議論を大きくまとめて行く取り組みを推進する。

7. 26期小委員会の活動方針について

早坂副委員長より、宇宙基本計画（添付資料6、7）等、現在の我が国の地球観測衛星をとりまく状況に関する説明があり、続いて衛星地球観測コンソーシアム（資料8）の活動に関する報告があった。

次に、タスクフォースリモートセンシング会合（TF）の活動（資料9）について高橋幹事から報告があった。

続いて、今期の本小委員会の活動について早坂副委員長から説明があった。CONSEO、TF、学術会議を横断した活動を推進することが重要である。次回の小委員会のときに具体的に議論したい。シンポジウムやワークショップを開催し、これらをまとめて文章としてアウトプットとして出していく。

今期の活動について活発な議論が行われた。主な意見は下記の通り。

- 人文社会経済を含めて、ぜひシンポジウムでリモートセンシングデータの有用性を積極的にアピールしていただきたい。
- 衛星観測データはお金になるかどうかが使われるポイント。地球環境の関係でCO2について、地域、国レベルの取引ではリモセンデータを使ったほうが効率がよい場合があり、急速に広まる可能性がある。
- オープンサイエンス、オープンソースサイエンスについて、11月に地球観測のための政府間パネルが閣僚級会合を通じて、オープンにするばかりではなく、きちんとデータを管理する方向に舵を切った。
- 米OSTPが2023/1/11に2023年にyear of open scienceという公式アクションを発表した。米NSTCがオープンサイエンスの公式定義を公表し、連邦政府がデータ共有計画を提供した。NASAでもinitiative of transform to open scienceというカリキュラムを公開。
- OSSの検討チームがJAXAでできた。NASAのSPD41a方針への対応、ならび

に民間の知財の保護、オープンにする範囲等を議論する方向。

- 衛星データの時空間分解能向上が顕著になった。森林の違法伐採、汚染物質放出や、希少有用資源植物の特定など、世の中に公開したらマイナスになる部分がある。暮らしている人々の利権を含め、折り合いをつけて行くことが必要となる。全部オープンにするべきということでもない。
- オープンサイエンス、オープンデータについて、現実的には各国が as open as possible, as close as necessary という形で、必要があればクローズドとなっている。科学者として共有すべき情報、その前に検討すべきことは検討という考え方が、衛星データが社会的存在になればなるほど重要。
- 国は民間の小型衛星のコンステレーションを推進している。小型衛星の開発に加え、衛星の実証や研究を先に考えることも出口の一つではないか。NASA は Decadal 2027 に向けての動きもある。
- 学会会議の議論から JAXA へインプットする事が重要。衛星観測も人間の倫理観と合わせて議論が必要なところに来ている。広い視点からの地球衛星観測のありかたを考えて行くことが重要。AI も有用だが危険性をはらんでいる。シンポジウムも有用なやり方だが、計画の段階で行政とも議論して進めることが必要。
- 衛星観測で何ができて何ができないか整理されているサイトが欲しい。素人にもわかるように情報発信できるとよい。地球観測による情報発信のやり方をアトラクティブにする必要がある。

最後に早坂副委員長から、今後の本小委員会の進め方について発言があった。年3回程度の会合開催を検討したい。CONSEO 事務局、TF との連携を具体的に検討する。官を巻き込んで議論することも検討する。6～7月頃に2回目を開催し、より具体的な活動案について議論する。年度末には今年度のまとめ、および来年度の活動計画について議論する。

以上